橘曙覽遺稿

志濃夫廼舍歌集

五

土岐文庫
文庫17
W48
4

文庫 17
W48
4

010185194634

帝國圖書館藏

咏劍

肝冷く腰乃白蛇吾竟ハう玖く鎮めり山松の根ニ

破研

山ニ在て磨りやふりしる古硯奪むとうゝ雲囚ニ入る

破き〳〵硯〳〵きて窓圍む竹看る心誰ニか〳〵む

碎きツる吾腕臂のふこり玖ハ窪ニニ見する古研のふ

玷瓦硯ひと数ニさくろいきて山買ふ銭を無しくらけり

古硯ゆのうち石は吾さかう價こそるふ軒乃山杰

愚も山を出しかち玷瓦硯囊ういぬ弱ゆをふしく

松乃露うけて墨する雲の洞硯とりふも山乃石くい

六鶴圖

啄食

志けりしく数葦原せはめ屈し崔乃あさり所をえて羣立い

顧歩、

たくこいる羽の上数見めくくし砂ユ足さに浦の蘆多豆

唳亮

眞名鶴の立つる一芦鳴やうて後も響ぬ乃こに大空

舞鳳

有のきりひろけ翔あさ風ちかりやりい仮崔い数こまて

警露

寐いうきめ崔のさくろ数更る夜の松ちりこほす露ニ知らふ

理毛

屋すくなくて上毛故くろふ浦の崔沖つ荒波うちも驚かれ

踈竹

ほうやうとあらけふく立竹乃心ふくもふくひあふのち

勝澤牛翁先生の老の坂路やうく乃かまるそ

ちり御つくしろうせそ久くあるくひ申文そて

まろをけをとなるみさもふくて年へるる

をさくひとりくこそひるえのぬくゆ[illegible]

翁ろたいることと所り[illegible]此ろ唐のかくれん

すろ人ろちこあいくて題淵明歸去來圖とふ[illegible]と

を詩ュ作ろせるろの心ュ伝詞とておのをハ

さろろこュ案撫させて君我見ハ画ろある人ろ能ころハ似め

ある日辻曹生ろ桃莊ュよはとて歸ろさろち

なりく息ろるくなりてえあゆそかくくふり今滋

ュ背負れて橋こュえけるろ苦しき猶やきて背

おハをても行ろ死ュよろ鹽町ふる東屋埜

梅ろ家ュ入て一皆ハろ息をやけやきろかくく

てすこしたちふらふらするやうなおほんけをハ
今滋埜梅二人乃肩ゝとりて喘きくいく
家ゝ之り人ゝにさそけるとて寐とろゝ臥
しらけるとろの翌日の夜埜梅ふりけく来
てふるる枕上ゝをらいく近きろ翁のつゝ
まちやにのゝまし物しゝらゝは聞をれとうく
まてゝおろくゝとろゝは思ハさうけるゝ昨日のあり
さまを見くゝそうちおとろれけるとうもくかる

身のほとゝて人うゝはをありきまいんやうの叟
あゝ(ゝ)へくもいゝ翁の病のやうなうこゝ二
腹のうちいとくくすくるうあゝまのとみんゝり
ちをハ何らも食物のかと過さるやうゝと
はゝ心もちひすへきありさる病の身ゝあゝ
ゝも何も思ハれ人うゝはをてうほきとの
飽くまてくひまいんやうの叟ゝまるは翁乃
身ゝてあるへくもいゝぬきとりゝ今よ

りたのゝ諫とにたゝこゝひて人ゝゆきまゝ人と
とは更ふり家ニ在りても食もの量をさゝも
人の許より贈りもれるものとあるもこゝニ
はふくひまひう身をやゝふひろこれひてあ
ゝ命をぶちめまひろとかゝれくいひきゝも
ゝ風よの埜梅ハをちふれ昔よりの爰とちち
とハあゝし人のやゝも思そ年ゝかゝる
もゝゝ物ゝくゝふりゆを頭うめゝく今ゝは

この物ゝためしのいさめ言ゝちもりて食ひ物
ゝ我ゝ身ゝよゝの身の害ひとなゝん中の吏は
絶てすまれゝりと誓ことゝゝく其れ乃を聚
いとゝくゝ心のゝちゝよゝとひゝく夜中まて
西人物ゝゝりしゝをりゝる昔
千代の坂乃ほりをけゝせ諫おとうけゝは杖を打ふりてゝニ
中根雪江君の許より鶏の肉と梅酒ときま
ハりけるよゝちひ

芹のもゝとくあゝ物よしまつ鳥うまさえなんなんと又ゝせゝ
うめのこ乃いとすき人といきゝいへんらゝぬ味ゝ醉ゝ狂へゐ

今ゝ　慶應三年丁卯六月廿六日　紙をそゝめきをて今
なりとしく米錫りゝこき打ゐせ出とこゝ
ゐけるとき

御ゝくこ乃露ゝくゝもむ片菜さゝ具へぬむの紙杜の下艸
我ゝこゝかゝるあゝや民くゝをゝゝひ洩さめ露ゝハあゝめと
人の家ゝて誰ゝ筆のあとゝゝ有ゝんゝゝ蓮

雪ゝきゝる繪を見てまはゝこゝゐゝふりて讓
りくゝへくゝおゝゐけ型とゝ乃家の物ゝては
ゐしもち主玖問けをハ紙ゐうと紀人ゝてさる
さといひ出むも憚ありとゝもかくゝても高間山の
ゝゐの自雲と思ひゝきまゝむより外ゝまゝ
ゝ物めゝする心乃ゝゝふさは我なゝせい
ゝゝひ紙ゝけきことハ獨ゝちゝめきて
蓮弩池のもゝの知ゝゝきゐハゝり立て香もの紙ゝけ型

日ごろへておの誇を埜梅にあひていひ聞を
けるおとありしを埜梅ころゝにけて居る
をゝしく物をる近藤某ゝとのゝ居ゝて語り
けをい近藤某さはりのをれんにハおのを
身にうけも此吏をうひんとさりもくいひ
るゝより埜梅をゝちる吏をのゝえさせをうん
ゝは翁いハりゝまろうんといくれさいやう
ておのをにかゝる手ひきをゝ出きゝけを彼人おの

いゝうんゝは拙ゝはゝゝ思ゝ係またとゝ
らき人にあひゝりけゝ翁のおゝゝ遂をん坊り
きにゝふりといて笑ひをふくむおのを聞て
みちひき出きゝけるはゝ祝しきことなりけゝは
れゝをを近藤主ゝゝゆきてなをよくさんをゝ
ゝまはしき坊めゝ来てゝんとをゝりゝを
ゝち近藤某のゝに行ゝ何ハいをに此画を
やくれゝゝ物をせまはしき吏のをゝくいゝ

けしき

いろ〳〵へく雲のあるにふるちり我うえさせよ一とゝのそれ

ちて後近藤氏のもとよりうゐ画をもとめらして翁

之えさせへくとはうおゐせらけ是今ら之い

あゝしら物し筐ふゝもとのくてまゐらせん

といへは志ゝくくまちえといひおこせけるう紙

しきてらふにすゆうはやう見さに何

はうれき日のけをもまちゐにおほんいきま

哥をゝて近藤氏之けうはす

待とは二ちゝ有うふ蓮花ゝ乃世ゝしては見らをさゝむ

そその雲ゝ手之入とて死もせは竟ゆきて君ゝ責むゝを

ありくてうけ物おゝらもとにきけりうゝさ

いふうれしうけしものいゝるはゝの蓋ゝ筆

さしめゝして

浮蕚くり返しゝかへりて見きほしうゐし蓮手ニいりた

四十谷邨之知れる人ありけり大安寺の山之游ひ

見れのう家を休むとなろこしゆくとあまたゝび
せうこん長月ハろ空ふゝ晴ゝゝ日
子ともあて出ゆく東屋埜梅をも誘ひけり稲
原の邸うちすきるゝある家よりゆうれく声
ゝけて埜梅ゝいゆこへう物しまゆとりゆ埜梅云ゝ
ふりとつく声けし人さはゝろくのやけゝ
處いゝゝとゝもうゝん我家ハ此南れりゝ
うあるる物ゝそうけしゝあゝあるせ

客人ふゝもしるゝゝ心やそゝゝんとをむゆと
ゝしゝる我ゝ来ゝゝやとゝゝくゝゝ紀ゝゝゝゝ
れゆよりゝゝゝゝゝゝ子ゝゝゝけ盞ゝゝゝ
ゝあゝ心ゝろゝゝ我の子ゝそゝろゝかゆゝゝゝ
掻ゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝ此ゝ松ゝけゝゝゝ生
いりんゝゝゝゝゝゝゝゝ山ゝあふゝゝゝん茸
ゝり物ゝゝゝゝゝゝゝゝおのゝ山路ゝほゝ苦ゝゝを
るを見て翁はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やりて背おひまゐらせんとて肩さしいるゝ

いと心くるしくは思ふもれどうゝいみこまれうけて

の薊おりろうこのろれまちあくる道をも心やすけ

こせおひありきて松ばけのうちれり生いてさる谷と

見ればそこ〳〵平らなる處もとゝ出し物ゝおそれおの

を一人ばかりおき皆木の根ばかりさゝ見ありく

茸くさとりうとはくちるれのらまとりさるとゝ

ろどころちきゆくそ

採りとるばかり我こ貢くさるまをひりくるに鄰うりむ

日くまとりけれは皆山くらて歸路のあるま

れれにありあふ紙とり出させて戯をそる

年暮ありもしてて人乃せこ貢れて妹の山ふこをしる

うくふん走り書ゝるものはあゝ顔臂口なた

筆をちゝりくはくそゝゝ物うくいとるくちく

皆の者おれしろうて頭をあれむ

とりなゝ手とて書くまとゝ思ふはまをめ物ゝ今れあるまひ

ふとはるなつぼうるは今めりとやおもひ

みるまんう

かくしてれのう家ゑをくるほとに上月景光君

乃来うして今かくと待をるとけんをあまりゑお

そるうりけとはらいて歸りうひこけりとたのう

顔こるするうち妻ううふかきのうしおきうく

りけん奇ふふ机上ゑある見をは　松のみ

ぬいりとれ山う拾みん又藥うんくうう雲ゑ入

めるんなとありうのりこをあくる日せうこうて

乃こうおきゑりしみるるかうきて見ハへり

足そうしてくうちりくう思ふくりしうく三とひ

まていくけうくうのーまくせるこのあやうく

ちと

君をのくまふふ乃戸かくて出つるもちひきまれをとと浅知を

遠ありれ病とする藥とう山くうきてきくり君來と

ふて今日明日の日を二いま一ふひおとう

しまうゝ

大安寺方丈のさいつゝれ乃ゝ稲原山ゝあゝ
ひゝゝよゝきゝまひて稲ゝの埜宦ゝうれ翁の
ちゝおとありけんゝは我山寺ゝつゝを来へき以く
ちゝゝくゝもいゝつゝゝゝしめゝ物ゝれいゝて此ゝ
ゝゝゝゝれ今一ゝひ山寺ゝゝてふゝげく物す
へゝゝくゝのゝせとせめゝはゝく来てゝゝと埜宦
いひおこせゝゝよゝ乃ゝとゝる日まゝりけてまゝ埜

梅ゝて出ゆく稲原邨ゝゝゝり埜宦おゝゝれ
埜宦新ゝゝに山ゝのほりて在ゝゝゝりゝふをゝ
ゝはゝひゝけゝりてゝゝゝゝゝ歸りくゝたのゝ面見
るまゝふゝゝゝの妻ゝるもれゝ此おゝ邨の寺
ゝゝとのゝまゝん ゝれりハ幾日ゝもあ此家ゝう
ゝゝてあゝへけゝをハさおゝひてよゝと一言いひ捨
ておのゝをゝゝひく寺ゝゝふゝげゝゝゝゝて
い旅来ゝゝ西ゝゝ此寺ハ門入ゝかゝゝよゝゝ異ゝする

さくいは寺のうちなる一をうちはらひて隔
りてありしいほる松雲院塔主とまやとしへ
しとはけめるり方丈のいひふくめおきすゑり
しふりとて其うちへあふいけいとおくま
りし流所すて厨なとは廻廊つきとてはは
あを道ハ一丁半そらも有へう思ハ行て物を
いりるとにふき所とな此なりくし廊を
こもれくうち奔りて往来して物をひふと埜

崔ひとりとあるすちは翁来ハ云松雲
院のなるにふりておきふれ心とうふんやう
とよりものせとて方丈のうをてうちはらせた
きをりしなりとう夜とふりて埋火かきひろけ
三人ら物をうしるとろのちうあけてゆく
りれく入る人あり顔らく見れハ上月景光君
なりけりいろうてかるふんとふうさにをは
しは物もえいえいく

たゝ〻ますや君さへんけて来つるを顔まもるをなとりひのうけ

こさをうへんけ人いとゝく我ハさをうをと

りれしちて今朝こゝさきうひゝすにあるゝ

ひて游ひつのをやりけるなるう翁きうへりと

方丈の告をへる聞とひとくいをとゝにすの

しるるふりけを慮しもあをこのやうう山寺を思

はえにかゝうをやりあへふいうれるすくえんう

をうりあやゝかりうをへ廻廊のゝうをう

くうをて入くる人のけゝにに埜崔おうろくしき

声いて方丈の来るふりとりよやをまとめ

しる中をうちまりうゝ今日をるくをみし

るこゝにうをこはのをさまるをもの

しをつふりのうふれのを先みをにいさりて

みせうこにちうまるへきるゝふとうにて

よしにくありうへんけ人も方丈もさく会り

をりけりあくる日の朝山口清香とゝひをく此人

上月君〳〵とひとり言してうあるまてくろ
ほきおとをて孝顯寺方丈長谷部南邨君に
けちよく相やとりの客ちう一むをうちに
来るい思ひとらぬとろてといわること歌
をて何く経物をうしう
山寺乃いとゆの洞の相やとり一夜ぬをあく衣手の露
埜宿ら今朝茶の〻瓶の折枝乃をくこおはき
なるふ松ふけちうくる苦瓶のあるを見ておろ

れれのとけうしいおもしろし
ゆくりふくうく来うあひやをりひかうあくもの行ハあ物の
夜中うめさをく戸あけうちおろふをれ
あハ伽とはをよの麦乃杉ゆにをきゆはろく在明の月
まあ苔ちのりと生いいるうふりけをハ朝夕け
のこをうきて埜宿ら物てなし
食ひあれてなりつる物の味ひも麦さまニよりて新しく食ふ
方丈とうろの山ゑれふり小亭ゑ入りてよもろ

けしきをとる

うちもとゝ埜山の廣さゆく水のふかさ目こあく昔ふるへゝ

年ゐ御寺のすりけうまる匠ふりとて高屋

邨某出きて物ゐてくをまいへは書てゝ

ゐ此さくゝおのゝ里そらゝは今よりのち

鮭のゝをおひゝしうよりくふを大網とて

ゝふるふりさかるるゝはいとれもしろし

あふりえへゝをうめす見ゐきえとゐもろ

これも

網いをゝ大臣とゐゝ舟あゝひまゝをきは来む日頃へひ

方丈人のゐてきてまあゝをいるふりとて松けい

一りゐるかゝゐ取りいゝして奇けといて

ゐうはゝありく筆とる

入相の鐘ゐ音ひゝく杉むらの下道ふりくうゐる炑の香

おゐみて所ニ傳ゐる屏風久隅守景のか

きゝる画さいり年ゐ見ゐゝはありけゐう今日

まくるもろ〻看もてゆく〻大きのとろそ
守景そくとゝいて見るとはさらにやゝかは
まてきこに竟いれて物しけむ筆のいきほひ
見ゆふるも周茂叔の手〻蓮弩とちてあ
と李太白の瀑布見て立るとの二圖ハおと
て抜出てえんゝせるとゝいへき画の〻
ほひなり
おなじ泥のおとくろゝの研まゝ腕とゝいへき

のくて三日あゝいをりて家路〻杖を曳きさ
り家
今ハ三とせ四季をやすれいゝん松井畊雪ゝもと
ゝゝ書畫もあゝく見ゝゝける中〻高嶌芙
蓉のうゝしる不盡山のゑめとくまりてほしく思
ひけをとうくもえいをそやこゝける我此ゝ
いゝひて何ゝもゝゝ物ゝくれもゝまたゝく夜ひ
る衾ひきかいきてのゝ有々をハ心のゝゝい

よ物さびしくふりもてゆきゆくはれをおと
もいとつてに思ひめくくさくせぶん あや
くあるつけある夜ふさめふと此あの画う
はを見まほしうなりけるニるりいとあちをれく
おいるをきるはあをとうれ繪ゆつりをへく夜
ねるまちゆ 便りをとめ畊雪のもを其う
いひやりるに畊雪すくやくなひて人して
とさせおこせりけるをひやりはやりるものいく

えりおとそくんと思ひこりひてありけるほふ
ぷをきは画とり出にとひとく病もふにもうち
とほれやそ壁うくけさせておりは目もそな
ほてうありし
瘦肩ぬそひやうてるおうあ雲あれ山を手ニ入をいとて
見し富士乃画うをこくはふしそぬ心の曇り太りう尽ぜる
上月君乃明日れ故郷ゑやとりける夜よの庵いと
ちひさをニ案乃黒木とて作りる大きやうなる

火桶いけるを粥おけるに今滋とふさりひをけの
うへにこちてまち寐に狭きをいとそらふし
七夕きよひをけに沸きゆ足さもものへぬ蓼に龍うちふる
かくて夜をうゐいなゆあとにをりく頭すくけて
窓の外にうち見ふとん
更科やおそすゆ山にまる月なくめてら冬夜ハのゆさゆを
妹乃七夜を一夜になりむそらおほえ行夜
ゆの夜うして幽ちくいけをハ兩人ともに起あら

アくるに朝食さつくひてもてく此庵年ふりくる庭
中にまきと木ともしけくひくるうけニらりてあや
しくおとろきて作りなしれハおのりく遠
れ山中にやとりるやふるこちもくれていと
けくあるとてれはるにあアれ君こちくしひ
しくも食ひもけくしそ何けも何くものの
ハ物も驛路おもひやるありさまにあくくて
ちをうりけれハいと旅こちりうりてこう國の

さかひをあとにちるとゝろれやうは思ふれば

ゆくすゑや岐蘇の山路乃旅こゝちあちらこちらの命ふりけ淀

あるゝの君初ゆきをゝハの新たなるものゝ

朝乃けゝを見ゑといふ

我さめのあけ乃故ちと今一夜寐ての朝に雪を見に来む

福壽艸

今滋ゝ近きゝとゝり初る友とちゝ許に行ゝ歸る

さ福壽艸の有ける玉買ておゝ乃をゝ家ゝとゝせむ

とてとてゝゝり机上ゝ置ておゝを見ゑといひける

皆

正月立ゝゝれゝゝ乃ちきゝゝ玉受て今歳も笑ひあふ宿

去年の暮ハゝ三九の殿乃れもと人ゝちより被

風といふ物さまざまにけり不知火の筑紫舟縣う
あまぬうふく袋さまさま身にいくれハいまこは著
ぬ人さへあくこそ見ゆらんとおほしく今は冬を
ぬ翁とふりつるなといひたこそあらうそき
さま物をうえにくうちいくきて
雪といふものは見すきと寒ぬあやき冬に逢にけるかも
同し殿の内乃今一そのおと人さちりもの
くさはなるふとのさまにに今より後いろ風

夜さむもまくるおとにしとは物著うそ
肩うち層やうう
かくはうり針目細うに縫し衣いろ風うせも歛はとほさし
梅鳳
とのめさ風多鉄りに心ゆるして苔をはうにふ棋乃夜あらし
梅畑
匂ひあるけふり浅曳う梅の花ちろめはやき曇りをろと故
嗅梅

梵物乃立き祇つきて一ふゐ嘆とる函の文くをらうめ

倦繡圖

縫とゝ乃〳〵あやニ倦けむ手を頬ゑあて部ニよる少女のち

倦書圖

〳〵ゑ〳〵もあ〳〵物ニは手もゆゑてゝとたこゝぬ書を見ちに

雪羅漢

功徳いく事とや思ひ立すゝあく〳〵とおゝハ雪もまろめに

窓高く積おとゝ〳〵て雪佛崩さやとうゐとさにおり〳〵ゑ

冬夜月

〳〵ふりゐる雪の八重山月いて〳〵書をいりて空とゝ乃ゝゑ

古寺案

濃師乃さはゝ乃ゝは瘦ゝ〳〵め軒乃山松ふとゝゑさんとて

行ひの員ゝ帚ゑ〳〵るとたもい祇てきらもゝ吉て〳〵の糸

大御政古き太御世のすゝこニ立かへりゆくへ

紀御いきほひと成ぬる伐賤夫乃何ときほゑぬ

物〳〵いさゝう思ひ祇りて

百千歳との曇り知らしいる空きよく晴ゆく時片まけぬ

あくまでしくなる天地を思ひきや吾目味まぬうちに見んとは

古書乃この彩く物ひ出る御世をいふやく死眼人

廢をいる古書とも動きいで御世あるこめ於昔のゆけとハ

湊河ゐる楠正成朝臣の墓石の文字我揩り

とゝ係をいる受てとゝ係人乃あるゆ彩り

見らく尭峯を了ぬくかの朝臣ゆ忠こゝろは

季月ゐるまゝひゐうりはりてやんとれき物ゐる

旨り心あるこゝろ無きとうふく此揩り我さ

ゐとゝまゐるなゝりとなりとゝるさハ〳〵と人こさく

はゝとゝる大蘇心の芽かいくとり出る音や來

けんと季ゐるしゝうゝ色し眉根すきはう

ちれとゝまれて

年〻に御墓乃文字我ゆふや寫しひろむる君の眞心

ある昔

爻はしく何おもひけむ詩といふ書といふ爻あ係我うゝ

廿葺さひりめくる朝すめ寐みぞう聞て時うりはふ
ひらりそと思ひて出れは風ちむし全く好き日は日も得がてし
私乃無き空うゝ全くらぬ日ハ乏き我人ハいはんや

頼山陽

外史朝廷れもひニまゝゝ勵せしらし功績おほうり
慶應四年春浪響ニ
行幸あるう吾
宰相君御供仕まる御ゝも仕まりに上月

景光主のめさ祢てそ保くゝ乃ゝりけるうは
乃そ廿むけニ
天皇の御されいうて多豆ゝのみとうにすん難波津ゝ行
すめゝきゝ稀の行幸御供せる君乃されいひ我ゝらゝ志幽

評梅

檜垣ゝこゝめ乃楳とおほゝそ匂ふ枝いき見あけゝを介ふ

雪谷早行

明ゝゝる谷間を見れハ蹈来る雪おゝろゝや木の根岩角

天使乃そろく下りぬへりくはあやをきをあひ
人もあいらめる中ニうちまりけれけき
をうゝ見まゝる
隠士も市乃大路ニ匍匐ふゝひをろがゝ奉る雲の上人
天皇の大御使と聞くゝニをかゝをうむ膝をり伏せて
退筆
人ニ毛を齔つくさ抜し圓頂ころはうちきて塵中ニ坐り
雪彌勒

一夜くゝ身改ゆもゝきぬ雪佛其曉ニ逢むと念ふふ
嶋田氏の理亮庵尼乃七十賀
芒のゝゝ目ふゝひあへる孫曾孫ゝゝの曾孫産むも見ゝゝむ
五月節句日伊藤政近君許より猶活くもける
遠き山里ゝうえけるふりとて味ひよく質の
和ゝふるゝと類ふし此ゝうゝてハこ乃ゝ無
ものふをハこよゝれゝ程しく思ひて
うとまをぬ匂ひ味ひ心をはひられゆ今日のあやめうりけニ

螢來窗

窗ニ入る雨夜のほゝゑむと照りて簾をおりのぼりける

庭落花

雲の塵昂乃末ニかけまくも畏き風のちらし去りこの花

紙漉

家〻に谷川引て水湛へ歌うたひつゝ少女紙すく

水ニ手を冬も打ひゝ漉きあて〻帝の白雪窗高く積む

紙買ニ來る人おほゝさまこの紙〻這まとはれる垣をゆるへす

屋なゝして紙漉くなとめ見やりつゝ垣間見すらは里の男子ら

黄昏ニ咲く苔の色も紙を干し板乃しらさニすけゝ見えけり

鳴ふる蟬ニほゝゑて竹〻く音きうゝや帝すきの小屋

流をくゝる岩間の水ニ浸しおゝて打敲く草の紙ニあるとう

豆腐哥

酸くもあゝる辛くもあゝぬ味ひを一かともてる豆のしゝるふ

淡〻しゝる味ニかとうゝ豆のゝる高きいやしゝ品ニまゝる

田谷邨なる櫻屋とゝ茶店の壁ニかいゝく

弱艸に杖を曳ては來へきなり后山すさ〳〵あはいへ

四十谷邨安達氏席上

白山の雪に鳴鹿乃川音に貯へとて富ひとゝ乃いへ

松雲院にやとりをりて今ハ出〳〵むとする時

窠に雲こゝゝけき玆寐ゐ見て十日のまりの日を過しけり

此御寺の山つきに雀巣ゐくきりけるをいとゝら

けん雛ひとり羽ひに疵つけ〳〵ゝらゝあり〳〵を

方丈いさゝりてとかく養ひらゝれけるハ日數へて

疵癒〳〵りけゝ雛雀さく去りてもとの巣にうへ

りけゝ玆をりしくは方丈の山のあさりにかけりくと

浴しいゝ乃物がゝらゝ玆聞ふ

疵いえしにをき玆君に見せむとて大空とゝく舞ハ入にけり

栢原邨貴藏山に入て何くさ乃木をとりきて杖

いくりけゝ玆五本さへとゝきてくゝとけゝいつとも

おもしろきいくりゝ玆を心〳〵ひしけゝほと

思ひやゝゝ貴藏ゝと乃と〳〵玆心ゝいひ聞せ

けるおとはを其まゝ哥ゝいひ続けゝ物に

一の杖千とせの紀経てまた一の五の千をも続てつけゝ

病ゝ重くなりける時

死ゝやまひ藥のまゝと思へゝ我ゝ人のくすり飲めとゝ

死ぬへゝと思ひさとめゝ吾やまひ醫師くすしめ何ゝこゝハせん

死ぬへゝる病我癒を醫師の今も世ゝありや吾ハ見おゝハに

死める命とゝめへさるゝくすり師ハ世をひろけもと有へく思をす

宮北君の御許とり鯉とゝりけるよろこぶ

旅ゝあるる君我朝夕あひとゝ奥やしゝゝふ我ゝろしゝ見

鯉をしゝゝふゝゝうゝしゝ正月立あるのゝうゝとゝ外ゝかゝむか

示人

天皇ハ神ゝまゝ天皇の勅とゝいゝゝこゝまゝも

太刀佩くは何ゝ為ゝも天皇乃勅のさゝを畏むとゝ

天下清く拂ひて上古乃御まゝりことゝ復るゝゝ出へ

物部のおゝておゝと勇ゝとゝ錦の旗ゝいゝゝゝるゝゝけ

狛逸也君の其御名の心ゝを哥ゝゝゝてくを

よくのぼりくるをよろこめる

劍太刀壁ゐらせおきて胯長にいひい高き嘆こくるを

五月廿八日より病床にありけるまゝに野山の

けしきも見うくく臥してのゝありけるこより

いとくふくさむくめ大きなるうゐかものゝ

に水いと小き魚放ちおきて朝夕ちちふら

む

湛へいる器乃水に鰭うゝせ海川見さる目玩よろこばん

顔のうへに水ちらしつゝせて飛ふ鳧を見うるさとも眉こゆさなり

窓月浮へる水に魚躍るとも枕邊の廣澤の池

ひとをもひて小き鳧のゝふ音に寐るともふくて寐る目あけゝる

佐々木久波紫ら

大御軍人に名れて越後路ゐ下さる馬の

それをけニ

負氣ふく勅ゐ背く奴等玩罰め盡して歸さ日を経て

同じ皆まゝ芳賀眞咲に

大皇の勅に背く奴等乃首引抜て八幡宮に捧

吉田重郎主に

大皇乃勅頭に戴きし功績あるハせ戰ひの場

伊藤政近主に

朝日影こがやきあるむ御旗をハ戴き奉り太刀取り進め

小木捨九郎主に

大皇の醜乃御楯といふ物ハ如此乃物乃と進め眞前乃

岩佐十助主に

ちゝ〻ゝ錦の旗乃下に立い身をよろおひて太刀をかさせ

同一時埜邨恒見乃

愚なまとゝ流も乃ゝ大勅〻〻一道にいゝ〻きはせ流

勅乃ゝむくゝるを正し見て罪乃有無うとゝひはゝせ

伊藤某 仲右衛門

大皇乃背ける者ハ天地にいをさ流罪乃打て粉にせし

山内某 佐左衛門

大皇乃勅頭乃いゝ〻そふるはん太刀乃ゝ流仇あゝも

明治十一年八月廿九日版權免許

出版人　石川縣平民　井手今滋
美濃國厚見郡今泉村寄留

發行
東京日本橋通貳丁目　稲田佐兵衛
京都三條通堺町西入　出雲寺文次郎
大坂北久太郎町四丁目　柳原喜兵衛

書肆
濃州岐阜西材木町　山岸彌平
尾州名古屋本町八丁目　片野東四郎
越前福井糸手上町　岡嵜左喜介